



重修真書太閤記

十一編

五





218 録  
門 459  
巻 105

消  
福  
赤  
重  
修  
真  
書  
太  
閤  
記  
十  
一  
編  
卷  
之  
十  
三

重修真書太閤記十一編卷之十三

夏目舎人助高名の事

并湯淺七右衛門首を奪ふ事

小幡帶刀本苗ハ思田氏沼田の一族にして智謀人  
みまくるのこゝら心も剛に打の取ても達  
者なりしか信貞小田原を籠る所のて此帶刀  
を彦三郎の後見とせしなりまらふ夏目舎人助  
下知入より旧友たる天野治右衛門が謀言よ  
又宮崎の岩を破られしと無念あるとせんと  
ねくとのてかへし返り合せて火花をちらして戦

會  
同  
印  
攻

大月已二編卷十三



ひける。と見。夏目舎人助も馬をせいで。鎧を  
とろく。突立つたて。たくかみたる。然はよ。小幡  
手より。茜ぞめの羽織着たる。武者只一人。ありか。つ  
て。寄手をつきのけ。取てかへして。上杉勢を切  
ちらひ。味方をまとめ。後やりたる。有せぬ。たぐ  
めのふらむ。ええ。さうけり。舎人助あり。と。馬を  
かけよ。せ。村上源氏の末流。有田越前大目定朝の末  
葉。夏目左衛門尉定國の嫡子。舎人助定吉。おつと。呼  
ぶ。れ。か。の。武者。馬を引かへ。その方を待。こと  
久しかり。や。いざ。参らふと。聲をかけ。突のは。あ。い  
たく。か。ふ。あり。さ。ぬ。火花をちらして。目ざま。既

み。六七十合よ。をよひ。か。とも。勝負。あ。かり。け。る。  
何と。う。う。たり。らん。か。の。武者。の。馬。驚。ひ。て。と。孫。あ。が  
ま。け。ふ。と。い。ま。か。の。武者。真。逆。よ。落。馬。したる。を。夏  
目。組。あ。る。澤。田。作。右。衛。門。か。け。よ。つ。て。首。を。か。ん  
と。か。し。け。は。処。へ。甘。糟。備。後。守。侍。よ。湯。淺。七。右。衛。門  
と。い。ふ。もの。さ。う。近。つ。き。か。の。首。を。う。ぢ。ら。ふ。み。け  
ゆ。く。を。夏。目。い。かり。て。馬。を。飛。ら。し。追。ひ。め。湯。淺。三。持  
たる。首。を。と。ろ。か。へ。さんと。か。し。け。ふ。時。湯。淺。鉸。具。を  
い。れ。て。馬。を。と。ろ。ら。し。舎。人。助。ま。ぢ。く。い。う。り。太。刀。を  
ぬ。ひ。て。湯。淺。三。さ。め。の。端。を。切。を。と。り。た。ま。の。夫  
を。取。り。ち。舎。人。へ。その。ち。追。ひ。せ。し。ま。く。南。を。さ。



て突やぶる有さぬのさかから猛虎の群羊をかゝ  
か如く阿修羅王の荒たるさぬもこれよのいふて  
勝るへき雑入原ををくくつきふせく氣色も入た  
る処へ小野寺刑部石坂與五郎まきくまて舎  
人助と共にかせざりつ舎人助の砥澤川の端み  
てよき敵一人はきふせ自身首をとらんときは処  
へ神保五左衛門尉とせまきり一太刀うちて助け  
たるぞと詞をかけよの舎人助あり仰き我うち  
止たふ死人ぬり首不しくの取まへといふとて  
神保面目あげよ御免ゆへとひきて敵中へ切て  
いり甲首一のとりて引かへい舎人どの御覽ゆへ

かくの如く仕合い〜い標便よかして給ゆへと  
託言して引口かきたり免前まはらち藤田能登守  
勝関の式を取行ひ松枝の本陣み〜り首帳の次  
第を正しける処へ夏目舎人助澤田作右衛門を同  
道して甘糟備後守る役所み〜り舎人ら打たる  
敵をあきおろす作右衛門よ首とりゆへと申付し処  
へ御組湯浅七右衛門かけき〜り澤田をおのけ  
首をうらひてゆその首このものへ御かへ〜ある  
べ〜と申入〜かハ備後守清長大にせきたち我等  
ら組よ尤やうふふ不埒のものをい〜り但〜これ  
と申證據ありやといへ舎人助か〜おあり楚忽の

大月巳二編卷十三



と申へき定吉と云ふにめしゆり澤田も取と申付  
たる首をうむひ取れそのの白地は黒き二引兩  
のせしもの形り御組の志るし相違ふその上  
ふそのさしめの残りは札をばけて御足せしへた  
しかは證據をのけ置るに申より我隊のさし  
めの残り形り取あつめこれをあらためてはみ端  
の切たる指物あり舎人助さくさよう我手よさる  
おろしちふ指物のさしをいさして合せさふみ  
かよも只今切とらせたるも相違ふそのさしも  
のし主を呼いどせば湯淺七右衛門ありそのとき  
舎人助澤田をよひて湯淺みひき合せしは湯淺

赤面して詞あり備後守湯淺をむきよせ清長も隊  
ふさやうの不法のものをねしと夏目どのみいひ  
口を塞かどいふく我等も恥をあぐえ臆病も  
のめいささへきと怒りける時七右衛門流る  
る涙をお拭ひこの期みをよびかく申はる命  
おさささいめををかまへいと云ふにめせはべ  
くはへとも事のしまつ一通り申しけ仕べくは夏  
目どの討たす武者ハ白倉左衛門尉と申て小  
幡親しきものみ七右衛門牢人して爰はこ  
遍歴仕る如上列にいさる實は困窮仕り  
一錢の貯心かくぬりゆよから白倉左衛門尉



みめぐりあひ身の不仕合せをあげきしへハ左衛  
 門尉我館ふともかひ長屋一のかしあさ之朝夕の  
 冬かふい冬いふおよむ夏冬の衣服までまごべ  
 て白倉の情みて乏しからむ三年あまつとまごぐ  
 けうち川狩みいでしおりの不ちかる喧嘩を仕  
 いぐり多くの人を討て白倉の家を立のきそのち  
 當國へそころ甘糟殿の御隊よりつては形う今日  
 夏目どの打あひたよふをまぬハ重恩うけたる  
 白倉左衛門尉形うはうとてこれをたまけて夏目  
 とのを打へきみりあらはにいふせよしとためら  
 へうち舎人助どの見事は突ふせたよひつむハ

せめて首をうぢかき供養せよとそんしとの事  
 みゆけて首をハ一堆の墓とかしてはへハいまハ  
 入用かき口身形う甘糟どの御恩をむくひ申  
 せむはと残さ多くゆへともといふより早く刀を  
 ぬきてのんとを突はらぬきて死したうけり舎人  
 助ハ備後守ハ二度仰天しさて生捕のものハ舎人  
 う討て首をハ湯淺にとらるし死骸の物具より甚  
 ぞめの羽織を見勢かハ是こそ白倉左衛門尉  
 めの具みゆと申より舎人ハうちたる敵の名  
 字をあり湯淺ハあまハ義理のためハ死したる侍  
 よと無跡の名を芳しくハ



流布本湯淺七右衛門縛首うらむしよを記す  
誤ありいま湯淺の家譜よりて改正し

このと陣中にかくれかくれ取々湯淺の事を語り  
傳へしかば神保五左衛門尉舎人助うちとめし  
死人よ一太刀うちて助たうと詞をかけしことを  
さぢやが藤田の陣所よりかうの仕合と  
申々れへ藤田能登守舎人助をよびて此ことを訂  
しけるよ舎人助そのとをよびてみ濟たりまらり  
かへしるいふべき事よあらはしといふ神保いやや  
やうみいふへども御邊と某と相對しをましめて  
心よからんぢぢれゆへ藤田どの御耳よいせ我等

う誤せしとを明白みせしむと申けし舎人  
助再度うちかへしかんかえ見ゆへ某打ふせて  
ゆへいおそ神保どのたやうも俺したまふかれも  
右のその死せしゆへ實は神保どの御芳志  
たるへしと申て舎人助も打口らひ互まらるよ  
く引つらむしと申る神保のちよ保料の家よ仕え  
隠岐守と名乗りなり

關白秀吉公相列御進發の事

并伊奈熊藏智謀の事

天正十八年三月朔日關白秀吉公京都御發駕あり  
ける時花の下乃紹巴



關六えくゆく末おびくかきこかか  
といふ發句を獻し祝し奉る畿内南海山陰山陽の  
勢十七萬騎伊勢尾張兩國の勢を合せて十八萬餘  
騎尾張國春日井郡中村の關白の生處といふを以  
てあぐみ三日逗留したまひこの村をへり作り取  
無年貢とふしたまひかひ百姓どもよろこひの  
躍ををかりて關白をかくぎめ奉りけるその中よ  
願白の老人二人をかくもらみよびたまひ一人の  
作十郎一人を太郎作みやと仰られかひ二人と  
もいりみり仰の如くゆと申その時關白作十郎ハ  
をせよ九の年まゝおや今年六十五歳ふるへ

太郎作ハ七のえりゆりも上であらうと覺ゆるなり  
左様々と御尋あまかハ太郎作いりみり御意の  
とく六十二歳みゆと申上る關白さうやく光明  
寺の榎の下で軍のまかびした時をれハ大將太郎  
作ハ旗持作十郎ハ太鼓うち有たふんと小田  
原の北條退治ハ寐かからて事ハむむ其方二人供  
せいと仰はけられそれより二人御供よめつれ  
らまゝとやか又志をり有りて關白仰らまける  
作十郎太郎作よくまけよをれ草やりみ出た時  
ぶん仁王といのりまゝ有たよくをれを泣き  
奴もやあいのいりたと仰らるまゝハ作十郎太



即作仁王ハ。まてで果す。たと申上る。關白か。仁  
王ハ死しんた。まてか。それ。仁王ハ幽靈ゆうりやう。あ。こ。ま  
る。む。う。を。れ。を。泣なせた。不ふどの。骨ほねぶ。との。奴やつだ  
幽靈ゆうりやうて。も。く。は。く。かい。あ。いつ。を。堯ひんり。ち。み。て。小  
田原おだわらへ。の。ま。ゆ。め。の。か。と。仰おほい。ご。され。これ。を。も。同どうく  
御供みまが。ま。台たい供く。たま。へり。此こ一節中村いちせつちゆうむらみ。く。ひ。ひ。同どう月げつ  
十日。三列吉田さんれつきちだみ。つ。きた。ま。ひ。ける。か。去さ。八日はちにちより。雨  
ふ。り。の。ぎ。きた。ま。い。川がは々々水みづ。ま。て。橋はし落おちたり。十一日  
猶なほ雨あめ止やまれ。とも。御進發みしんぱつあらん。と。その。御催みまよ。あり。  
ける。み。駿河すまがはの。御家人ごけにん。伊奈いな熊藏くまざう御ごち。さ。う。く。く。此  
処こゝ。み。出張しゅちやう。一萬事いちまんにごとを。奉行ふりやう。ける。か。御本陣ごほんぢん。み。參上さんじやう。

雨あめを。ま。て。の。ち。御進發みしんぱつ。ま。う。は。へ。く。そ。ん。ど。奉り。い。と  
申上まを。り。か。い。關白せんぱく。汝なんぢ。あ。ら。い。や。兵法へいほう。み。川前がはまへ。み。あ。り。て。  
雨あめ。み。あ。い。時とき。ハ。ち。やく。これ。を。渡わたる。へ。と。ソ。か。本ほん文ぶん  
あり。と。仰おほられ。し。と。き。熊藏くまざう。申上まを。ける。ハ。兵法へいほう。み。も。せ  
よ。何なに。み。も。い。く。せ。千せん。二に。千せん。の。小勢せうせい。あら。ば。然しか。も。い。へ。  
この。大軍たいぐん。先陣せんぢん。後陣ごぢん。十餘里じゆじゆり。を。へ。ご。い。も。急いそ。み。り。く。  
ら。ん。と。せば。溺死どくし。の。せ。の。多おほく。み。そ。ん。と。言上ごんじやう。せ。し。み  
より。關白せんぱく。大おほ。悦よろこ。を。せ。た。ま。ひ。あ。く。み。三日さんじつ。逗留とちゆう。あり  
案あん。の。如ごとく。半時はんじ。を。わ。り。ま。く。は。や。い。か。や。洪水こうずい。お。ひ。た  
た。く。く。して。民家みんか。多おほく。漂没へうぼつ。み。を。よ。へり。關白せんぱく。熊藏くまざう。を  
よ。び。て。太刀たち。を。賜たま。り。これ。を。賞あづか。り。た。ま。か。かく。て。雨



それしかハ進發ありける。宇都の山に至りたまふ時この処の郷民もちのやへまかこまり居て馬の沓とかちぐりを獻し御勝利の吉兆を賀し奉りしかハ關白戰場もむろの時かちぐりとい殊勝あり物とらそよと仰らむこの時着したまふ処の紙子の紅梅の表つきたる。胴服も黄金そへく賜えり。この処を四十年ちかくて通りたり。むかへ爰みて休む時ハ藤吉郎も今ハ關白從一位秀吉也。もむろの宇都の山をさゆく人もむかへと同じく替りしそのの面影と名のこぬりいさ歌よまんとて

宇都の山むろのまの人のあはれとさほをかりあそ面かろりたる。秀吉も秀歌なりそれかけとてかききたすひとわかやきては駿府も入御あるべし。とて供奉の行粧を正されける時石田治部少輔三成・關白の御耳もゆきて駿府と小田原との間近くまろも親しき姻ありいゝぬる謀のあるべき。よろしく御思案有りてあはへと言上りけむ。關白いさく御猶豫の体ありくは。淺野彈正少弼長政もかりいゝ何とて御猶豫あそをさる。や御むかひとして。や間ちかく御出はたり。居かから待せたまると無骨いと申上りかハ關白打



こらへをたまひ御快く駿府へ入御より海へや  
て沿津の御陣城へ御入あり關白先陣の大名たち  
をめぐり出され北條箱根をこしてまのからんと思  
召ゆるみ箱根よりこの方へ首さし出し得るもや  
軍は勝たるぞとて御盃をくぐり出たり先陣の大  
將たちいひまも御詔の通り北條滅亡うへかひお  
くひと祝したてまつりさぐりめきつとけし  
役人御旅館へ参上して申上けるも只今あやさ  
旅人のいでさうらひ間御旅館ちかく由制し  
へ御旅館とい關白殿下の旅館おるや身へ近衛  
家の連枝なり關白殿下へ面會のため下向せし

なりと申充その供立を杏葉牡丹の金めんか  
るお不ひかけし長棹狭箱長刀の川も近衛殿の持  
せたまふ如くと全く同じくへハ相違もあるま  
如何からひ申へくやと言上りけしへ關白殿下  
淺野彈正をめぐりたまひふしその人おれとも供廻  
りかど注進の如く何さゆ近衛殿の連枝も有  
へしそのろう行むかひいひまも旅館の軍門の  
と取りまかへし寺院みて見立ち旅館と  
そのうへみて面會をへしなりと仰出されは  
彈正少弼取ものも取あえんばむかひやかて走  
かへりて申けふハ仰ま志をかひまかりむかひ



処々々として半途よりあきあき間弾正少弼路傍より  
かゝるまゝり關白殿下の御使として淺野彈正少弼  
御迎ひ參上のよしを申上げ奉り近衛殿の御連枝  
乗物をとぐめやかくのうそのく戸をひきかひ  
彈正少弼ちうくとまぐこより是をこれの近衛  
殿の連枝とおもると以色黒く頬骨あきて鬚の猪  
の怒り毛の如く頭の月代をうて鬢をうけ上下着  
し大小やうたり言葉の京家の人から鼻まやく  
きて陸奥人とおおえくく彈正少弼とやらん關白  
殿下よく申せよとさる緩急も申ては繩かけの  
てもくはるかふまゝく存けへとも一應うかひ

奉ふと申上りかゝ満座の面々あきれきてふよと  
御説の有やらんとかゝむを飲居たりけふ処へ  
殿下莞尔と笑もせたまひ手あらくまへからん志  
からはそのまゝ此方へめつて来れよとありけ  
はよより淺野これを同道し御旅館の溜みおし居  
このよし言上りたりかゝ殿下のいひのみ吟  
味をへしと仰らせけるふより彈正少弼まかりい  
て其方事京都の人みあるへららばまうらば何と  
近衛殿の連枝たらんやいひのり問ふ及もは  
有体も申へしと何つ時彼者はけしからぬ失  
禮をふかまふものかゝ其方の殿下の家人かろべ



一、我道かゝるへ、惠雲院關白准三右、植家公の末子  
ふから、陸奥の生長したる、音聲の京都人と同  
から、久されとも、正しく、今の前關白太政大臣准三  
右前久公の弟あり、殿下は百會を、事明白より  
るへ、と申けるより、彈正少弼心のうち、近衛  
殿の御官位以下、まへて、淀を、あつたれ、近衛  
家、縁かき、人、あ、あ、ま、さう、お、う、ら、かく、の、如  
き、その、此、あ、ま、あ、ま、へ、ま、あ、ら、は、と、た、の、ひ、既、ま  
組、ふ、せ、繩、を、か、け、ん、と、お、け、け、る、時、殿下、御聲、た、かく、  
惠雲院、准、右、の、末、子、あり、當、太、政、大、臣、殿、の、御、弟、あり、  
と、や、ら、や、と、あ、ら、へ、御、越、あ、ま、や、と、い、う、れ、不、ど、ま

彈正少弼、ま、め、その、座、は、居、合、せ、た、ふ、大、小、名、目、と  
目、を、見、あ、ま、せ、こ、ま、不、思、儀、お、り、殿、下、何、と、て、  
ま、う、の、狂、者、盗、人、の、その、体、あ、ま、ま、を、御、前  
ふ、め、した、ま、あ、ま、あ、ま、く、の、狐、狸、の、ま、け、ま、あ、ら  
ま、は、う、何、あ、ま、せ、ま、怪、敷、と、ま、う、い、の、れ、も、膝、を、進、め、  
肘、を、ま、う、何、事、あ、ま、何、れ、越、度、あ、ら、は、我、ま、ま、組、の  
か、ん、と、御、襖、の、際、は、座、を、ま、め、殿下、と、もの、り、詞、を  
う、や、ひ、居、た、り、誰、り、あ、ま、と、お、り、ま、ぬ  
その、ぞ、あ、ま



重修真書太閤記十一編卷之十三終

重修真書太閤記十一編卷之十四

近衛殿歌修行の事

并久下岩松生立の事

關白殿下秀吉公治津の御旅館みゝて先陣せんじんの大名  
 たちみ百會ひゃくかいあらせられし御盃みさきの次第ついであり  
 ことごとくは軍勢ぐんせいの御手配みてばいをよとんとまはる處へ近  
 衛殿御連枝御下向みゑのつらぎのしたむかひのよしを言上ごんじやうしけいひひ御混雜ごんざつの折まげ  
 おしりめりよりたままをはるまいひ御混雜ごんざつの折まげ  
 節ふしありこ此こ處こへ入御ありて迷めい惑わくおしりめり何  
 みても寺院じやういんを照して御旅館みゝてとありたてまひるへ



しと淺野彈正少弼長政は仰付られしは彈正たち  
かつり近衛殿の連枝と申せども其体いりも怪  
しくいひいさしめて吟味はらまつはへやと伺ひ  
しと殿下手荒よりいへり此方へ首連來れ  
と御意ありければまかちそのを御旅館に  
めしよせらむとやかく御前へ出されは其長  
六尺ふあまり色黒く鬘あれたる形想只そのと  
見えは御前伺公の大小名いりおはめのみや不  
議の狂者なりはるみては不敵のくをせめかか  
眼をまわし守り居たり關白殿下そのめのみ  
かひたまひ近衛殿の連枝といふ其方より惠雲院

准后の御子といふまをまところ惠雲院殿よりつと奉  
りし何年そと問たまへり父みては准后の永祿  
九年七月十日六十四歳みて薨御すまはまら  
り廿五回忌なり持まらる三歳の時みてはと實  
よとそなりまら奉りし殿下やそ祓て惠雲  
院准后の御墓にいひくと御尋ありけれり惠日山  
東福寺乃塔頭海藏院に葬送してはといふ殿下  
た今の准后はいくひみからをたまふぞと問たま  
へり丙申の歳みて殿下と同年まはと申はその時  
殿下およそぬその方惠雲院殿下の御子みては  
るへしそなりおらその方の音聲の陸奥ノ形りい



かかとの准后の御子とて陸奥より移りて  
かひまゝ准后の御子といふたゞかひは證據あり  
やとたづねたまへりさんは移りて母みては  
のりの奥列南部の被官にて久下と申の女  
まひとて世都見物より東福寺通天の紅葉見  
てはひい処へ惠雲院准后からせたまひたりたか  
く廻廊みて御目見しはひい東なる外の濱の者  
と聞しめされめつらうき歌まくりやとおふ  
めされやかて御所よめし置れてはありあは子  
移りて二歳ふりける年都の將軍義輝君三好  
ら為し弒せられたまふ御墓所の移りか父准后

の妹みてはへりその騷動たれひやらせぬへ  
それより母と共に陸奥へくぐる當年まで住居  
てはへり音聲の外の濱の善知鳥に似たりては  
正しき證據と申はこれふりてきりいり一  
巻を關白殿下御覽ありてそのまゝ巻おさめ暫く  
あひかり申はありまの旅行のはかるも有へり  
弾正旅館を沙汰せよとありけるまゝ淺野も心得  
まげまのあひひかり然へり寺院を點して旅宿  
とて移りてはういして相應まちせられたる其  
のり殿下淺野をめされこの巻物を京都への不せ  
近衛殿よまいらせ返辞を申下をへりとありしか

太閤日記編卷十四



ハ彈正少弼承と奉書をそへて近衛殿もたてま  
 のふまゝはよ日敷へて近衛殿より御書ありか  
 たてまのらむ一巻もそのまゝ戻したまふよ  
 つく近衛殿の御書をひらき見たまふ仰せま  
 せらむ如くこの巻物の亡父惠雲院准后自筆  
 相違かこれの奥列外の濱の住人久下と申  
 の女かき父准后ははかへ一人の男子をま  
 の二歳のころ我等叔母塔光源院義輝君家  
 の為は殺せらむと我れよりひきひき都へ  
 乃中かるとはく東へくくしては我等弟の  
 此の如くまゝと申す父の筆跡はさう以て

御うぐはひあるまゝと仰下されたり是は  
 度彼をのをぬり出され關白殿下の巻物を  
 したまひその方父惠雲院准后の御筆大切  
 志置はへたゞこの廿餘年のあり外の濱に  
 かから何とおめひて只今とてとおひたち  
 しまや定めて子細あるへて我れをかくり  
 仰らむかハ我れをかくり事の外祖父ある  
 みまちのちの自然と人も久下の岩松とよ  
 びひそそのまゝ久下の岩松と申は奥列の  
 邊土ふへ殿下の御威光たけくまゝ  
 したるゆゑんと申さくこの度御下向の



めて申沙汰してはより我等そんははきし事ゆへ  
 のまかり向てはぬりところへけるみより殿下何  
 ところおろしめしけんいりみ岩松今日ハ急々評定  
 せでハかかぬとあり旅宿みかへり休息あるや  
 明日すく見参をへくはと仰らむしハ岩松淺野  
 みともふとれ旅宿みかへり休息をそめくこの  
 岩松といふもの誠ハ外の濱の地士ありけるや二  
 三年前はや近衛前關白前久公關東へ下向す  
 ばし去のびやかよ所々見物ありけふ下野やむ  
 ろの八嶋ふたの畑ゆくゑ定めぬ旅ふれとゆかり  
 たつ孫てむらさきそのふらぶ筑波の峯とをくはゆ

こけりぐる奈渾の野をまゆれハ誰も白川の關の  
 板屋をたげぬとどそふと答ふ人し形く猶た  
 深くえりのくの末乃松山うちろしてう紀世の人  
 のめでちや以籬うしぬまきりあめてかよふ船人  
 こゑくよ八重の塩路のうきしづみ定めかき身  
 乃戀衣ぬきて色ハかちらしとひきまを以かお  
 屏風り浦かけからへたる網の目よめらさぬ中の  
 手枕やいりあふせま千賀の塩かまのけふま  
 むせふ袖のうらまのへとささるその人と色をも  
 香をも去は人ぞしはや宮城の萩の華松のこどり  
 をためしめて千世万世もうおそねを情をかえん



蝦夷人のきむといふ形。一の戸や二の戸三の戸  
 かるへひの戸九の戸。越々津輕乃里みり  
 たす小瀬も西日へかへふ。こよひの主人を  
 尋ねると人々あやしく宿かさひあまりみおこ  
 け給ひいかへ下り門不立よりたまひ行暮たる  
 旅のその一夜の宿を芳志あせと仰らぬれ。岩松  
 う父の翁たぐ人からいと見たりてやと形へ入  
 せたまへやと一間とあゆへ請ふ奉れ。殊のふ  
 小悦をせたまひ。ろろかげかる田舎人も見し  
 のよらぬその形うけまと思食けるうちみ御湯ひ  
 ひかせまいらせや。か柏の葉を搔ききて粟の飯

をきくめまのりを鯖の子乃鯨鯢の楚刻かと取そ  
 ろへ。酒たてまのりかばいよ。御心とけた  
 まひまがう。かから夜寐の夢も御心やま。むまび  
 たまひなふ。なご主人の翁いう形。御方ま。ま  
 ま。やと。ころ。形。尋。ま。いら。せ。か。の。その。真。實。心  
 を。よ。ろ。ま。む。を。た。ま。ひ。是。の。何。某。ま。ま。ゆ。を。よ。を。  
 有。の。ま。く。み。御。物。語。何。う。か。の。主。人。の。翁。お。ど。ろ。を。  
 お。ま。れ。さ。は。御。か。く。み。て。ま。ま。ゆ。の。ふ。を。し。ら。ざ。り  
 け。ふ。て。の。悔。し。き。よ。と。以。の。外。み。警。衛。一。俄。み。御。座。を  
 改。め。か。ど。し。ま。ろ。し。の。あ。く。み。御。逗留。何。う。け。ふ。後  
 入。の。岩。松。御。供。し。て。北。陸。道。を。京。都。ま。て。送。り。奉。り。り



けふその時國々所々新關ありて人をあらため  
以正しく難義をよびひそく憚多き申条よりへ  
と御尊体みかろ奉るへいと申上りかハ前久  
公よにもうれしげみ打笑たまひさてこそ御系圖  
を御認めありて岩松み下されしなり岩松大悦  
ひそれより御紋の本をたまえり長棹狭箱長刀の  
覆ひを作しとあり

久下岩松謀を關白殿下獻を侍事

并南部領内騷動の事

關白殿下久下岩松存付しとありて參上したり  
といふことをしりかへりて考へたまへとも更

お入りめし付おきみより夜明しかり岩松をめし  
出され其方昨日申せし存付しとありて何みやと  
仰られけふ時岩松臆を色も形く一大事の謀み  
しへ多聞をそぐかりし彈正を御除くははし  
へと申みより淺野を御次へ志りぞけ關白殿下と  
岩松と只二人さしむかひたりその時岩松まゝに  
より申上りやう小田原の北條をてみ東國の權を  
取ひて百餘年及へりまゝに關東八ヶ國の不  
か陸奥出羽のそてまでも年來の親しくありその  
上唇法をて齒さむいと申諺の如く小田原亡び  
くのち佐竹弱かるへし佐竹ろびび伊達南部寂



上の人々次第に敗走を命じて鏡まかけて明らうか  
 然ら殿下御下向とそくていづれもく小田原  
 後誥の用意を仕りひへども此諸家をのく自立  
 の心あはる托ゑる急速より北條と一味同心仕ら  
 びひさうおのり中を就く佐竹の腹心のやまひと  
 申へ鹿嶋行方の諸郡を二千三千より五六千許の  
 地を領し侍三十三人ありこれを三十三館と申  
 小幡の大炊頭辰勝鹿嶋の十郎治時玉造の右京  
 大夫宗幹畑田の右衛門大夫通幹手賀の與一太郎  
 景幹根古屋の彦四郎詮春銚田の市正札の治部大  
 輔繁幹中居の式部大夫定幹武井の加布美濃守林

の弾正時國津賀の大炊助小川の菌部入道兼恭小  
 高の刑部少輔定久嶋崎の左衛門尉幹義苅澤の弾  
 正忠通幹大生の太郎玄幹下吉影の野口忠兵衛八  
 田の下河邊式部大夫西蓮寺の小貫藏人田伏の五  
 左衛門麻生の三郎常安坂戸の芳賀伊賀守茂園の  
 小倉長左衛門嶋並の高須日向守青柳の武田大膳  
 亮信家武田の淡路守信房山田の八郎五郎家久海  
 老澤の伊勢守盛則鳥羽田の隼人正盛信行方の刑  
 部少輔貞久かと形りこのものとも佐竹を恨みて  
 以へ佐竹小田原へ出陣せしその跡を襲えんと  
 合從連衡て以を佐竹氣遣ひてはらみ身を動か



得以比よつゝ佐竹みこの三十三節をこくろ次第  
と仰付らせはるゝ常陸國へたちまちな治まり申  
べくは陸奥國を小田原までよよどの行程をへ  
だてはへ勢をいざいまごのたゆひより比へ  
とも葛西大崎と申て人氣の口は平処あり御仕置  
次第みろたちあちみ一揆をあり申べくその費は  
のらんと企むはその國中よりちくたる又伊達  
と相馬とを代々遺恨の國みしてたかひみその際  
を伺ひは事かれ何れも足長み小田原までうち  
出は事の有へあら比ははるかから殿下小田原と  
御せり合月日をかき採ひりよき時節かりと埭

をかかゝ地をそりとりて奥羽の間おさまりが  
たくはへよつゝ某ぞんはは計事へ別義み  
もはるゝ某をまひは津輕外濱の在地に於て  
一揆を企むはへ尤もは南部をりめ陸奥出  
羽の大名小名いづれも自國のさかひを守り取  
取れよとの心を決し小田原一味の約束へたち  
まちな破れはへ尤もは北條たけしと申とも  
孤立の勢何れのとら比べよその中み御計策は  
るゝ關東平均み太平をとかへ申へ關東平均み  
治まりは上み奥羽へ御勢をむけらせはるゝ破  
竹の如くみて誰一人御旗みからかひはをのちあ



らん一兩月ふの陸羽兩國六十餘郡一統又殿下の  
御下風よふびきゆへーと言上しけれハ關白殿下  
御手をうとせたまひはるく驚入たふそのるう  
の妙策今まがさらまお不しめし付せたまさるう  
しぞいゝみも存分よユ夫をめぐらし奥羽列の  
者ども白川勿來の關をこそくはやうみ取もから  
ひゆへと仰付らましとどみ岩松を日ころの願ひ  
成就せりとよ海こびねがら殿下ふふとたび申上  
けるハ御直まらうひたるをかりみてハ後々の  
證據ももあひゆし御朱印賜をうゆとくやと申  
上しかり尤ありとく淺野ふ仰付らましてその日ふ

増明けるふとどみ岩松三度頂戴しこれを頭よかけ  
とぐよ旅宿へ立かつり並川為八とく相傳の郎等  
を首具したふをよびちりはげ殿下の御托ゆしを  
得たりとこれ拜見せよやと御朱印をいごし戴かせ  
しかり並川も實は仰天しかりやうの大事やまし  
と叶ひしところ不思議なれさらハ早々歸國あり  
てハおそのの計策披露あふへーと夜を日みはい  
馳しかりと路次又種々のさしりつあまの治津を  
發途して十六日といふ外濱へ下着かりたり  
一族門葉よびあひむふみ岩松上京したうしかり  
つり着しと志らせたりその上まかくはべき大事



ありと觸たるの何事やらんいさや行て聞へいと  
らちの山く引もきらば岩松の家よりあひまう  
たり田舎かれの坐敷も出居もひろくと造り  
家との言あから二等三等四等五等の親属のまか  
ははるか縁の末もを家奴婢乃下々入至は  
まて去る〜交名よとあるは負の一千五百餘人  
の着到り岩松たちいづ近衛殿よりたまをり  
杏葉牡丹の旗おいたて關白殿下の御朱印を頂戴  
ゆへとて披て是をよとあぐるのいづとらあひと  
首をさげ額をあせし〜か〜おまは懸て南部境  
關をもと津輕外濱一圓も久下岩松關白殿下

又拜領したると觸り〜南部へ納むる貢物を抑  
留せ〜かの南部の騷動大やからば〜南部  
の元祖三郎光行ぬ〜文治五年〜めてこの地  
至りたまひ〜より嫡子彦次郎實光嫡孫又五郎時  
實と相傳〜それより孫次郎政光彦三郎宗綱彦五  
郎宗行彦次郎祐行弥三郎政連彦太郎祐政右馬頭  
茂時よて十代鎌倉將軍の世を過〜茂時の子を伊  
豫守信長といふ信長の長子ハ遠江守政行家督を  
はく次男ハ福岡河内守政房形〜政行の子を大膳  
大夫守行といふこの代より雙鶴の紋を用ふとい  
つゝその子義政その子政盛その子助政その子光



政その子時政その子通繼その子信時その子政康  
その子安信その子今の信直まで代々大膳大夫と  
稱せしなり。

別本家忠日記云天正十八年八月十五日會津領  
内大沼河沼稻川耶摩猪苗代南山六郡仙道入て  
白川石川岩瀬安積二本松等五郡七十二万石蒲  
生飛驒守氏郷よりあゝえ葛西大崎三十万石木村  
伊勢守父子小與え伊達政宗小本知羽列米澤三  
十万石をあゝえ浅野長政石田三成大谷吉継を  
して奥列を檢地せしむ十月葛西大崎より一揆起  
るこの時木村伊勢守ハ葛西よりあゝ子息弥一右

衛門ハ大崎よりあり家老成合平左衛門ハ佐治より  
ありありなり廿二日一揆佐治をせむは廿六日氏  
郷家臣をして木村を援けしむ十一月朔日氏郷  
會津を發以十二月浅野石田大谷奥列檢地畢て  
上浴をゆ処一揆の沙汰をさきて奥列より引返を  
天正十九年正月十日秀次相列早川より一揆  
平均の告をさくところなり



重修真書太閤記十一編卷之十四終

重修真書太閤記十一編卷之十五

南部勢津輕へ發向の事

并久下岩松南部勢を破る事

久下岩松より一揆を發せしと南部へ注進くらの齒  
 をむくろ如くありけふより南部家騷動以の外  
 ありて急々人數をさし向け踏はぶし岩松の首を  
 取らんと評定一決せし處に南部玄蕃まきし出  
 て申けるる程の事を起さるるを以て久下  
 一人の力ありあるへりら村々へふしたる廻文  
 ありしへし關白の朱印といふもの全くの偽りあり



あるへからば早く使節を關白へ法かちし。實々關  
 白より岩松へ朱印を賜りしや否といふと。成  
 ころは。めそのうへみて。岩松を征伐ありとも。遅  
 からしと申けは。諸侍一同。かど玄蕃の左やう  
 不臆したふよ。か關白とも攝政とも。いろいへ。尾  
 列の地下人藤吉郎とやらん。成出しかる。何と  
 て手をさげ。腰をやめて。音信をへぎや。岩松と云  
 への。當家の家人形。主り家人をうけ。何の子  
 細う。あふへ。早討手をさし。むけよ。と。さびし  
 下知。玄蕃。今。せん。や。形。津野。戸。越中守を  
 大將として。二千餘騎をさし。むけた。此より。岩松

方へ。さ。こ。え。し。かり。兼て。期したふ。と。入て。あ。ま。二  
 戸の。切。処。を。要害。と。取。た。て。杏。葉。牡。丹。の。旗。い。く。流。る  
 お。し。た。て。その。間。に。搔。指。か。を。勢。の。不。ど。六。七。十。人。を  
 かりして。固。め。たり。然。して。谷。の。隈。ま。ま。大。木。の。林  
 の。し。げ。こ。み。又。下。作。右。衛。門。稻。葉。左。衛。門。を。兩。大。將  
 として。究。竟。の。兵。士。百。五。十。餘。人。鉄。炮。の。の。の。八。十。餘  
 人。を。ふ。せ。り。け。り。越。中。守。の。要。害。を。お。し。よ。せ。見。わ  
 た。せ。ば。實。は。淺。間。よ。そ。か。へ。たり。さ。ら。あ。る。へ。岩。松  
 ら。分。際。も。て。何。不。ど。の。と。を。さ。し。い。へ。早。々  
 せ。め。の。不。り。蹴。ち。ら。と。い。ふ。よ。う。逆。雄。の。着。さ。ら  
 ひ。我。を。と。ら。し。と。責。た。つ。た。の。難。形。く。木。戸。際。み。お。し



よせたり城門の内より鉄炮少々うちかけしはど  
薬よのけしは裏かくまてみいづらひそのうち  
逆茂木ひさのけ木戸を打破り乗りつて是れ皆  
落うせて影もえびたをまてたる篝火の蔭に柳  
二三荷かさからべその殿より六七とりちら  
したる越中守からくくと打りらひ實は田舎人  
のよりあのみり勢みてありき。是等々心みて我  
我みむらめて軍せんとおのひしとの不思議さよ  
といひぬらう傍の柳は目をかけ何のその是へ  
取よせ一口のくして舌打し處は似合ぬ酒の味是  
いふかふとやらんと引らゆく飲をきて侍も組

頭も雑兵下部もいづはまて辛癩をさきて篝火の  
餘りみあがまこれ肴を二三荷あつめる柳を  
か飲ひくく不どみ酒へ元より津の國の池田  
かしせし上酒かまのとの不り小酔まのり越中守  
をらめ前後もあらはたれふたり時分はよ  
しと又下作右衛門稻葉左衛門鉄炮をうちかけ  
開をはくく二百餘人面もふらと法をかりれど  
酔とけく眠りかけたる南部勢いひさもその用  
みたつへらひ立何やりては打たを弓矢を取  
とり目あてさくまらき又下も稻葉の手をたつき  
心地より我等々をかまらましく敵を酔をたり



九段言一多考一五  
醉たふめの代打殺さんも不便あり鬚髯まろて追  
かへせたくし越中守のいましめよとと高平小手  
ふ志をうりひげ大木ふいかぎ馬をのぐを分捕し  
手始よと勝鯨波を作さる城戸をかくめ用心堅  
固ままわりけり南部への鬚髯をらる敗軍の士  
卒をせかへり二の戸のいくさみ打真一のこねら  
は越中守の生捕らむ我々かくの如しと注進し  
けさの大將ろめ諸侍大將物頭衆いひれよ大よ  
憤みくき岩松の軍配やこのうへの大軍を以て  
追手からめてより攻入只一時みせめぬくへいと  
下知しけふ処へ上方へはかろしひるせめを共

ろしりかつり注進しけるもはるも關白秀吉畿内  
南海中國四國西國の軍勢二十万餘騎ふ東海道  
を發向したまひ山中箱根の嶮岨をうちまし石垣  
山を本陣とし小田原を自乃したま見おろして口  
口より攻たまふま北陸道より羽柴筑前守利  
家上杉弾正大弼景勝兩大將ふ六万餘騎碓氷峠  
をうちこし坂本ふて一戦し松枝の城をかたき箕  
輪沼田鹿橋をうちをとり上野一ヶ國のこや北條  
の手をとりさし小田原落城遠から北條不ろび  
ひろし佐竹ひいて滅亡しそれより陸奥出羽ま  
るも關白の攻りつたまると疑ひかすと申てひ

大司已上編一五

日



と、いへ、南部の諸臣、いひとも、目と目を見合せ、如  
 何あらんと吐息をいひ、そて、扣え、南部玄蕃進  
 いて、又申上、御意、入、去、申、さ、  
 ば、家臣、たる、もの、道、から、より、て、お、不、し、め、  
 を、か、へ、り、ま、く、申、上、は、お、し、く、關、白、の、小、田、原、へ  
 申、達、せ、ら、れ、り、條、目、を、見、ゆ、國、郡、を、領、し、か、ら、京  
 都、へ、貢、税、を、納、め、官、名、を、稱、し、身、ふ、て、朝、家、の、宣  
 旨、を、申、上、は、自、由、の、い、ろ、横、道、取、り、と、申、を、以、て、考  
 へ、い、へ、當、方、と、て、も、同、し、ま、は、前、車、の、く、り、か、へ  
 ぶ、後、車、の、戒、と、申、事、の、ゆ、え、や、關、白、殿、下、へ、使、者  
 を、奉、ら、せ、遠、方、御、下、向、の、事、を、勞、し、奉、り、その、上、入、て、

自國一揆の起り、ゆ、は、直、ま、參、上、仕、ら、れ、を、や、く、  
 一揆退治の御免を蒙り、ゆ、や、御、祿、が、ひ、あ、り、  
 こと、ゆ、べ、く、ゆ、と、申、け、ゆ、大、將、大、み、怒、ら、れ、何、事  
 を、申、ぞ、當、家、の、新、羅、三、郎、の、的、孫、と、て、當、國、を、鎮、め、  
 外、夷、を、防、禦、し、ゆ、ま、て、四、百、年、ま、を、よ、ぶ、鎌、倉、の  
 將、軍、家、より、こ、の、や、京、都、將、軍、家、ま、て、何、の、御、沙、汰  
 り、か、く、代、々、の、家、例、を、以、て、を、さ、め、き、ゆ、南、部、領  
 あり、文、治、より、以、來、二、十、八、代、の、帝、王、も、御、托、り、あ  
 り、當、家、取、り、ま、を、關、白、秀、吉、と、や、ら、り、ゆ、の、ゆ、  
 顔、は、彼、是、と、執、行、し、ゆ、あ、そ、ろ、ろ、え、給、秀、吉、寄、來、る  
 と、も、何、不、ご、の、事、を、仕、し、ゆ、以、へ、更、み、彼、奴、も、音



信をへうらひかき孫を尤やうのてを申しよ  
そぐ謀叛人と同列たるべしと怒られし  
かへをへさ辭形くその坐を退きたる老輩第一  
形を玄蕃だまかくのどくおしひ誰かあそくび顔  
を犯してこれを諫むへさいびルも口をはくんで  
かこまゆ大将やかて立あかり誰かあふ着長取  
いせこれ自身かけむかひ岩松を打殺して腹を  
いんといっらむかとも何れ玄蕃う申処正當か  
とと思ひし処おれり御先をかけんといふそのも  
たし大将不思議のそのどもかお我出馬せんと云  
ふ供せんともせし惘然たる何事そやいゆとも

岩松一味のそのあふみやとていふく処へ又のや  
早打伊達越前守との關白の御味方して小田原  
へ参向いっせられは次は小田原の支城武列野列兩  
總列あふふ処四十七ヶ所おとくく落城いっし只  
今ハ小田原一城あふりそれさへ口々攻破らせ落  
城四五日をいつへうらひ佐竹どのをてみ降参  
いっせられ那須守都宮いひせも關白殿下へ参上  
いひぬる遠からし奥列へ攻入たまへを由みは  
御用心あふさふへくぬと申けふみよりさし  
剛勇我慢の大将もあふれきて自國にて伊達他  
國にて佐竹那須おと關白もあふかみといへり何

大月已二編下十五

六



さぬ當方へよせきとゆと有へし出陣してその  
跡をうくれば後悔をいとむその甲斐あるべの  
ら以てとく無念かから自身も向とんとむ為むと人  
此虚も乗し岩松も次第くみきり從へ津輕郡内  
をいふも及て大浦浪岡外を濱おのりまきり打  
やぶり切ふせそのち収納をかるく百姓を憐  
れにけふよりいひく岩松も從ひかびくこと  
風もむかふ草木も似たるはむの後ハまらん今眼  
の前の眼をさたとへを取りそのかくいとたの  
めく見えよと

關白山中城責御下知の事

并渡邊勘兵衛働きの事

天正十八年三月廿八日關白秀吉公治津の城より  
中久保の城へ入御駿府大納言家小御對面御密談  
數刻の後夜よりて戌の刻治津へ還御されしより  
御湯ひきたまひ淺野長政を召せられ箱根からび  
ふ山中の繪圖を御覽あて夜半をよみころ福  
原右馬助をめせしその方たがいまより諸將の陣  
屋よりつづつ明日山中の城をせめ申へそよしを觸  
れ時刻をたがふかと仰付らむけるその人々の  
たむくぞ北畠信雄の軍勢峰頂賀阿波守家政福  
嶋左衛門大夫正則細川越中守忠興蒲生飛驒守氏



郷中川藤兵衛秀政・森右近大夫忠政・戸田民部少輔  
これらハ・葦山の城を取かむへしとあり駿府の  
御勢ハ・中久保より山中越を小田原口へ押たまふ  
山中城へハ・近江中納言秀次・堀尾帯刀先生吉晴山  
内對馬守一豊・一柳伊豆守直末以下中村式部少輔  
一氏田中兵部少輔吉政等總軍五万餘騎とあり堀  
左衛門督秀政・木村常陸介丹羽五郎左衛門尉長重  
長谷川藤五郎秀一これらハ山中城の南のやうな  
まはり深谷を隔て嶮岨の峯のなり攻討へし  
とふれらとたりやかり關白殿下秀次卿のそかへ  
乃上形山へ攀のり御馬を立らし中村式部少

輔木下美作守をめぐ仰らせけるハ此處より見渡  
りたる出丸よてハ十町もあはるへし今まこし  
陣をよせ仕寄の根小屋を用ひ然はへしむぬ仰ら  
せしハ式部少輔承とり渡邊勘兵衛みかくの  
御説みあはぞ如何してよろしかりへしといふ  
勘兵衛兎甫とより山峯多くへごた定て委細  
見ゆりやうとて御先へ参り一左右申上  
へしと申鳥毛の大半月のさしをさし七寸餘  
己の大黒といふ馬よりちのり出しか立ち見  
えりたる出丸の普請を浅間みて攻破らゆ  
べくハ拍子中へ茶御勢をよせらせ候へし約束



ありちりくと走りてこれの遠くうへへやう  
 かくり思のなり普請も急相ありはとれも急忽の  
 注進いやぐと一町をかりと見たり処へ乗付見た  
 る処張番もいづく置けり鉄炮の者五六十人許り  
 有けるり何とおりひけん引て入るよつと勘兵  
 衛いよくちかく乗上りかひその邊に出張有ける  
 鉄炮のその一度みりるへ立いかとも勘兵衛を強  
 ちみ追下さんとせは鉄炮の砲乃をよつと見れり  
 出丸崎の幅やうく三十間をかりぬりいそぎ御  
 勢をよせらと去りゆへ旨使者を以て申入又  
 采を以てま孫をいかに七八町もあまし処を即時

式部少輔をせのなり間勘兵衛とりのかくめり  
 処へ五六人きり誰々参りたるぞと渡邊も詞を  
 かけぬり勘兵衛式部少輔へ使者を以てゆえや  
 仕寄もをよとけ一旦せめみあるべうおなえは  
 茶をやせめかてはとんと申馬を打のり堀きは  
 へとせつくといふ堀へ飛入るかば跡より十人そ  
 かり引つきて飛入るもや渡邊ハ真先も堀の  
 上へ乗ひへハ關白殿下御覽せられ鳥毛の大半月  
 うふゆまひをえよやと宣ひひ御尾をまくり打  
 たくきとや大貝を吹たてよと仰らむかひい  
 みる音太もふきいでぬ勘兵衛跡を見かひりゆへ



ハ成合平左衛門尉高屋助八郎坂井兵右衛門吉田  
武左衛門尉渡邊新右衛門尉赤井久左衛門尉ふと  
はぐい〜。出丸の幅三十間〜。長三町余あり  
敵も追まかひま〜。い〜。かハ流石ある敵共みて  
二三度かへ〜合せた〜。か〜んとせ〜を勘兵衛大  
音聲をおげま〜。間あらせ〜。追立〜。三丸去をり際  
まで追入〜。か〜。他の勢ハ一人も交え〜。中村ハ  
勢の〜。右の谷を〜。大母衣かけたる武者  
二騎をせ〜。〜。押し〜。〜。餘多からめて  
へ乗入。二人ハやかて。首取て御本陣へ持参〜。たり  
渡邊ハ三の丸の門か〜。〜。相添上簀戸あり〜。哉

付入みせま〜。欲〜。見〜。か〜。手前無人形〜。ま〜  
まか〜。丸の堀よう多〜。鉄炮を〜。ち〜。か〜。去  
〜。ためらひ〜。は〜。共勘兵衛も續き〜。坂井兵  
右衛門渡邊源七郎中川金平中村三次土方孫次郎  
古田久左衛門あり〜。〜。やい〜。鉄炮ハ中  
〜。果たるあ〜。手や淺かりけん源七郎一人勘  
兵衛も〜。跡を〜。めたり〜。さ〜。勘兵衛又  
真先かけ志を〜。の垣をの〜。廿間〜。かり〜。追  
立〜。〜。か〜。二の丸ハ門槽丈夫〜。〜。のり  
い〜。〜。〜。かりけるふ〜。門の照を打破〜  
込入〜。〜。歴々の侍多〜。〜。せ〜。〜。防ぎを勘

大岡巳上編卷十五



兵衛一鎗參りしとんと聲かけ突つて是れへハ二  
の丸へはなまは間敵とをいめぐさ二の丸へ乗入  
りしハあつみ侍多くふせざしをたく立  
本丸へ乗あかり内を見ゆへハ大形廣間ありて  
武者二百余もあふへ一勘兵衛とびをり突つて  
かりとを乾の首の矢倉へ引あがりゆを付入  
あつみ城主松田右兵衛大夫加勢もさつり  
間宮豊前守同式部同源十郎同監物池田民部少輔  
推津隼人正佐藤左衛門尉栗本備前守山下兵庫同  
源次山岡左京片山大膳富田豊後守等めさやふる  
まゝとやあひひん切腹して果ゆまよりその

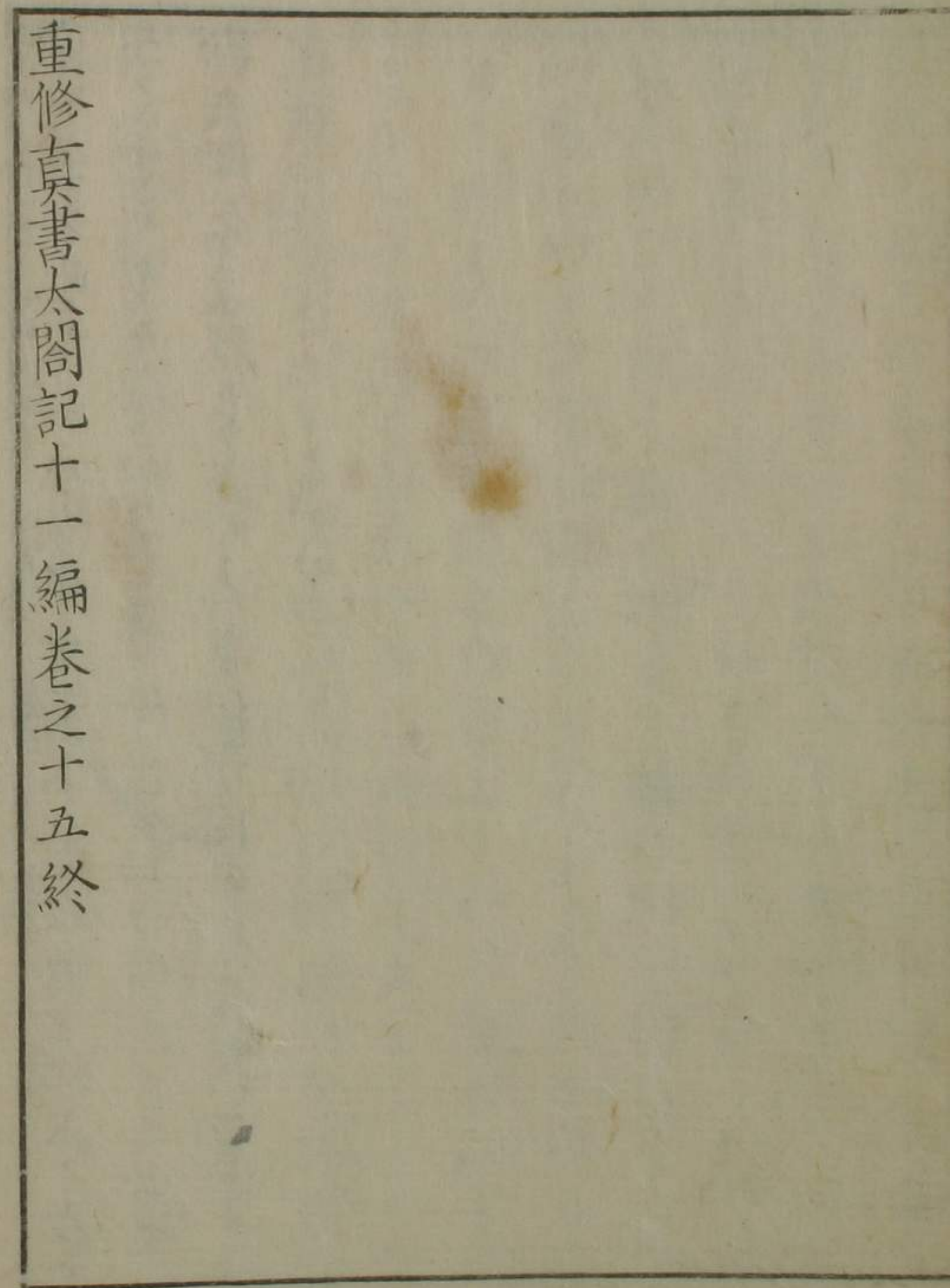
丸も落去してはひりなり今日出たより本丸まで  
のさつり誰先を争ふものなり中村の手を  
又の高名なり中村馬去るを本丸の矢倉にお  
したく山中の城をり中村式部少輔一人みて乗取  
去とよむなりかくて式部少輔の渡邊骨  
折れへ莫大なる忠義を立たうと悦みとかさか  
關白殿下より中村忠節よりこひおぼしめは  
の御使兩度ふをよひり其後勘兵衛或部少輔  
みさくやまの小田原ふあつみとやまげやま打  
めぐさんを申し今日のやま城を攻やぶり諸卒  
つるたる時功者ある敵の夜うちをかけたの







大隆記一編卷之十五



重修真書太閤記十一編卷之十五終

方



